

保護者の教師に対する「信頼感」構築に関する一考察 ～教師への「メッセージカード」の記述の分析を通して～

榎本 真実

(平成 24 年 12 月 20 日査読受理日)

A Consideration Regarding Establishment of “Sense of Trust” of Guardian for Teachers ～Based on Description of “Message Cards” for Teachers～

ENOMOTO, Mami

(Accepted for publication 20 December 2012)

キーワード：保護者，教師，信頼感，メッセージカード，温かい関心

Key words: guardian, teacher, sense of trust, message card, warm interest

I. はじめに

本研究の目的は、保護者がどのようなことをとらえて教師に対する「信頼感」を表現するのかを、教師への「メッセージカード」の記述の分析を通して明らかにすることである。本研究における「メッセージカード」とは、幼稚園修了時、あるいは学年終了時に保護者から担任に贈られるカードのことである。

幼稚園など保育現場への就職を控える学生たちに「不安なことは何か？」と問いかけると、「保護者対応」と答える学生が多い。これには大きく二つの理由があると考えられる。一つは現行の『幼稚園教育要領』¹⁾ などにおいて家庭との連携について明確に書かれていること、そしてもう一つは学生を取り巻く現代の社会的背景である。一つめについては『幼稚園教育要領』第3章には次のような記述がある。

(8) 幼児の生活は、家庭を基盤として地域社会を通じて次第に広がりをもつものであることに留意し、家庭との連携を図るなど、幼稚園における生活が家庭や地域社会と連続性を保ちつつ展開されるようにすること。その際、地域の自然、人材、行事や公共施設などの地域の資源を積極的に活用し、幼児が豊かな生活体験を得られるように工夫すること。また、家庭との連携に当たっては、保護者との情報交換の機会を設けたり、保護者と幼児との活動の機会を設けたりなどすることを通じて、保護者の幼児期の教育に関する理解が深まるよう配慮すること²⁾。

さらに、『幼稚園教育要領解説』³⁾ のこの項目の解説部分には、「幼児は、保護者の感情や生活態度に影響されることが大きく、保護者が幼稚園や教師に信頼感をもっていれば、幼児も安心して過ごすことができるようになってくる。」⁴⁾ と書かれている。ここでは、「幼児が安心して過ごすことができる」ためには、「保護者が幼稚園や教師に信頼感をもっている」ことが必要であると明記されているのである。けれども、その具体的な方策としては、保護者との情報交換の機会、保護者と幼児との活動の機会を設けることなど活動の例示にとどまっているのである⁵⁾。

二つめの現代の社会的背景については、この数年、「モンスターペアレント」という言葉が社会的に浸透していることが大きい。この言葉によって、学生は、家庭との連携の重要性は理解しつつも、「保護者とのかかわりは難しいのではないか」という不安を感じざるを得ない状況におかれていると考えられる。

それに加えて、学生自身が抱える問題もあると言えよう。たとえば、核家族化や少子化、地域の教育力の低下、様々なコンピュータゲームの流行による一人で遊ぶ時間の増加など、人間関係が希薄化する社会の中で育っている、ということがあげられる。さらに、メールやインターネット、SNS(ソーシャルネットサービス)の普及も加わり、「人と直接かかわって」自分の思いを話したり、相手の思いを聞いたりしながら関係を築く経験が少ない傾向がある。

つまり、保護者との信頼関係が重要であることは理解するものの、「モンスターペアレント」であるかもしれない保護者とのようにコミュニケーションをとり、信頼関係を構築することができるかという具体的なイメージをもてない状況におかれていることが危惧される。

実際に幼稚園教諭の資格取得をめざす学生のコメントを読んだり、直接話をしたりすると、「保護者に信頼しても

らうにはどうしたらいいか」「具体的にどのような子どもの姿を伝えればよいかなどという質問を受けることも多い。こうした質問からは、どのようにすれば保護者が教師としての自分に信頼感をもつのかが具体的につかめないでいることが読み取れるのである。

一方、学生が講義で使用するテキスト⁶⁾の記述をみると、当然のことながら「家庭と園とが互いに連携を取り合い、共に子どもの育ちを図っていく必要があること」⁷⁾や、「園と家庭と一緒に子どもを育てていくためには、まず保育者と保護者との間に信頼関係がなくてはならない」⁸⁾ことが述べられている。そして、信頼関係の構築のためには「子どもの姿を伝えること」と「親密感をつくること」があげられ、さらに、「タイミングをはずさない・クラスだよりの活用・聞かれたことにすばやく応答」⁹⁾などの具体的な方法があげられている。別のテキスト¹⁰⁾を見ても、同様のことが書かれ、保護者との会話や連絡帳やクラスだよりの活用をあげている。

このように、教師側の視点からは、その重要性和具体的な活動は示されている。けれども、一方の保護者は幼稚園生活の中のどのようなことがらをとりえて教師に信頼感をもつのだろうか。

保護者の思いに関する先行研究としては、木山¹¹⁾による研究がある。この研究は、アンケートを実施することで保護者の思いを明らかにしている。しかし、アンケート結果の内容は保護者からの保育に対する要望であり、その結果から保護者がどのようなことがらをとりえて「信頼感」を持つかについては明らかにされていない。また、他の論文を見ても、保護者がどのようなことをとりえて教師への「信頼感」をもつか、という研究は、筆者が探した限り見られないのである。

先行研究ではないが、保育の現場で「保護者の思い」を表現する場として、幼稚園における学校関係者評価¹²⁾や、運動会や学芸会などの大きな行事の際のアンケートがある。けれども、学校関係者評価では、前述の研究のような保育への要望だけではなく、現在進行形で行われている保育に対しての評価がされていることが特徴だと言える。しかし、これらはアンケートという形をとるため数値化して記入することが多い。記述欄も設けられてはいるが、記述欄への記入は必須ではないことが多く、あえて記入される場合には、やはり要望が書かれる場合が多い。また、行事の際のアンケートでは、行事の内容や時期、時間などは数値化して記入することが多いものの、記述式の「感想欄」には、要望とともに、行事における「子どもの様子」から驚きやうれしさなどが書かれることも多く、そこからは、保護者の思いや教師への「信頼感」を読みとることができる。しかし、この場合には、非日常的な行事の場面に限定されているため、日常の保育の全体の中でどのようなことをとり

えて教師への「信頼感」をもつのかという保護者の思いを読みとることは難しいと考えられる。

そこで、本研究では、筆者が担任をしていた時に保護者から受け取った「メッセージカード」をデータとして取り上げ、その分析を通して、日常の保育全体を通して、保護者がどのようなことがらをとりえて教師に「信頼感」を持つかという問題に迫ることとする。本研究における「メッセージカード」とは、幼稚園修了時、あるいは学年終了時に保護者から担任に贈られるカードのことである。「メッセージカード」は、区切りの時期に担任に贈るという、どちらかというと「感謝」を表わす意味合いのものであるので批判的な内容や要望的な内容はない。抽象的な記述にとどまる「メッセージカード」が多い中で、子どもや教師の姿についての具体的なことがらが書かれている「メッセージカード」があり、この記述からは、保護者の率直な思いを知ることができるとともに、保護者が具体的にどのようなことがらをとりえて、教師への信頼感を持ったかを知ることができる。その結果として、保育者養成においては喫緊の課題である、学生が感じる「保護者対応」の不安を解消する一つの手がかりになるだろう。

ただし、当然のことながら、この「メッセージカード」には、データとしての限界がある。

すでに述べたように、子どもの成長の節目である「修了」「進級」などを迎える喜びから幼稚園での日々を振り返り、感謝の気持ちを込めて、教師への「信頼感」を表現していると考えられる点である。したがって、教師への批判的なメッセージは一枚も含まれていない。しかし、このような時だからこそ、幼稚園生活の日常を振り返り、保護者にとって最も印象に残る日々の細やかなことがらを保護者なりにていねいにとらえ直しているとも言える。また、幼稚園修了や担任交代という担任との「別れ」の機会ともいえるので、過大に教師に信頼感を表現する必要もないとも考えられる。

また、これは「どのようなことをとりえて教師に信頼感をもちますか？」というアンケート調査ではない。しかし、アンケートのような形式的な文書の中では現れにくい、教師との日々の全体を振り返っての保護者の率直な表現が現れている可能性が高いと考える。ただし、分析にあたってはその方法を明らかにすることで、できる限り客観性を保持する工夫をすることにした。

以上のように、本研究における分析対象である「メッセージカード」は、その限界を十分に考慮したうえでなお、これを研究対象とする意味は大きいと考える。

II. 研究方法

1. 研究対象

筆者が担任をしていた時に保護者から受け取った「メッ

セージカード」の一部に当たる、計134枚を研究対象とする。「メッセージカード」は、具体的には、子どもの幼稚園修了あるいは学年終了の際に、役員の保護者などが中心となって、A4版あるいはA5版に、学級全員の保護者が担任への思いなどを自由に書いたものを冊子としてまとめたものである。保護者は、子どもの写真を貼ったりイラストを描いたりして工夫しながら、修了や進級への思いなどを綴ってある。

本研究で取り上げる134枚の「メッセージカード」は、次の通りであるが、倫理的配慮から、幼稚園名は明らかにせず、またクラス名は、機械的にA～Fとした。さらに、A組からF組までの年代はあえて順不同とする。

データ群1	3年保育4歳児A組保護者12名の	
	メッセージ	12枚
データ群2	3年保育4歳児B組保護者18名の	
	メッセージ	18枚
データ群3	2年保育5歳児C組保護者30名の	
	メッセージ	30枚
データ群4	2年保育5歳児D組保護者28名の	
	メッセージ	28枚
データ群5	2年保育4歳児E組保護者19名の	
	メッセージ	19枚
データ群6	2年保育5歳児F組保護者27名の	
	メッセージ	27枚
	全データ合計	134枚

2. 研究方法

本研究では、研究対象である「メッセージカード」全134枚をKJ法を用いて分析する。KJ法は「複雑多様なデータを既成概念にとらわれず、分析・考察することで新しい問題解決の糸口を探ろう」¹³⁾ という方法である。自由な記述から、保護者がどのようなことがらをとりえて教師に対する「信頼感」を表現するのかを明らかにするために適した方法と考え、用いることとする。手順は以下の通りである。

(1) 134枚の「メッセージカード」を新たにていねいに読み直し、グルーピングを行う。その結果、大きく3つに分類できた。すなわち、

- ①具体的なことがらの記述があり、信頼感が表現されている (計43枚)
 - ②具体的なことがらの記述はないが、信頼感が表現されている (計78枚)
 - ③具体的なことがらの記述がなく、信頼感も表現されていない (計13枚)
- の3つである¹⁴⁾。

(2) 以上のうち、①具体的なことがらの記述があり、「信頼感」が表現されている、に分類された「メッセージカード」

計43枚についてNoを付し、再度、KJ法でグルーピングを行う。この具体的な記述にこそ、保護者がどのようなことをとりえて教師に「信頼感」を持つかを明らかにするポイントになると考えるからである。

さらに、ここでいう「具体的なことがら」と「信頼感の表現」については、具体的に次のように分析することとした。

【「具体的なことがら」の記述について】

たとえば、「メッセージカード」の記述に、「E組では大変お世話になりました。a男はこの2年間でとても成長しました。」「先生の優しい笑顔とあたたかいお言葉で、私もb子も楽しい1年間でした。」「先生のおかげでc子も私も、不安なく、楽しい幼稚園生活を送ることができました。」等が表現されている場合がある。

これらの記述は、保護者の「信頼感」の表現と考えることができる。しかし、これらの記述には「具体的なことがら」がないため、保護者がどのようなことがらをとりえているのかを特定することが難しい。

一方、保護者の記述の中に、「お迎えの時や面談の時など、d男のトラブルのことさえも愉快そうに、話して下さり、私の心配事は笑顔で『うん、うん』って聞いて下さり、その笑顔に、いつもほっとしたのを覚えています。」「初めての日、泣きわめくe子をしっかりと抱きしめてくれた事、一生忘れません。」等が表現されている場合がある。

これらの記述には、「d男のトラブルのことさえも愉快そうに、話して下さり」「泣きわめくe子をしっかりと抱きしめてくれた事」などというように、「具体的なことがら」があり、保護者がどのようなことがらをとりえているのかを特定することができ、そこから分析することにした。

【「信頼感の表現」の記述について】

メッセージカードの中には、たとえば「先生を信頼していました。」などと「信頼」というストレートな表現は、134枚中1枚も存在していない。そこで、本稿では、「信頼感」の表現をできる限り客観的にとらえるために、信頼感を表すと考えられるキーワードを設定した。そして、文章中にキーワード、もしくはキーワードとほぼ同等の文言がある場合に限り、担任への「信頼感の表現」と考えることとする。メッセージカードを読み込む中で、そのキーワードを、次の10の言葉とした。すなわち、「ありがとうございました」「お世話になりました」「感謝」「安心」「分かる」「楽しい」「大好き」「励み」「うれしい」「忘れられない」の10のキーワードである。

Ⅲ. 「メッセージカード」の記述の分析と考察

1. 「メッセージカード」の記述の分析

データ1～6について順に分析を進める。「信頼感」を表現していると考えたキーワード、もしくはキーワードと

ほぼ同等の文言に下線を引き、「具体的なことから」は□で囲むものとする。¹⁵⁾

(1) データ 1 の分析：3 年保育 4 歳児 A 組保護者 12 名の「メッセージカード」

12 枚の「メッセージカード」の内、①「具体的なことから」の記述があり、信頼感が表現されている」に分類されたカードは 5 枚であった。5 枚の内容は次の通りである。

1	「先生！」と、 <u>笑顔で話す f 子</u> に <u>安心</u> しました。
2	「幼稚園って、すごくてのしいよ～」と言っていました。 <u>ありがとう</u> ございました。
3	<u>ニコニコ顔で毎日の様子を話して下さる先生</u> は、あっという間に“ <u>赤丸急上昇</u> ”でした。
4	<u>子どもたちの様子をよく見ていて下さった</u> ので、 <u>安心</u> でした。
5	<u>何度も何度も子どもにわかるように教えて気付かせてあげる</u> ことの大切さを <u>先生の姿を見てやっと分かり</u> ました。

No.1, No.2 で書かれている「具体的なことから」は、共に家庭における「子どもの様子」である。教師は、保護者が幼稚園における「子どもの様子」に注目し理解するのだろうと考えやすい。しかし、このメッセージを見ると、保護者が「子どもの様子」を見ることは、年に何度かの保育参観や行事などの様子より、圧倒的に家庭における様子が多いことに改めて気づく。家庭などでの親子の会話に、担任や幼稚園のことが話されることは容易に想像でき、子どもが話す内容や、表現は拙くても、その表情や雰囲気から楽しそうな様子が想像できることで、保護者は安心し、「信頼感」をもつと考えられる。

No.3 は、降園時に教師がその日の保育の内容を保護者に話す場面をとらえていると言える。No.1, No.2 とは対照的に、保護者が幼稚園の様子を具体的に知りたいこと、知ることによって安心することが記述から読みとることができる。この保護者は、記述の中で担任交代による不安を抱えていたことを正直に書いている。教師が笑顔で幼稚園における毎日の「子どもの様子」を話すことで、不安が安心感に変化し、「信頼感」の構築につながったと読み取ることができる。

No.4, No.5 は、子どもたちへの教師のかかわり方について書いている。No.4 では、「教師が子どもたちの様子をよく見ている」ことを書いている。具体性には欠けるが、そのことが「信頼感」につながっていることと考えられる。No.5 の記述を見ると、保護者が教師のかかわり方をモデルとして子どもとの関係を変化させていくことができたことを読み取ることができ、いわば保育者としての専門性が証明

されたことによって、それが「信頼感」につながっていたと表現されている。

(2) データ 2 の分析：3 年保育 4 歳児 B 組保護者 18 名の「メッセージカード」

18 枚の「メッセージカード」の内、①「具体的なことから」の記述があり、信頼感が表現されている」に分類されたカードは 7 枚であった。7 枚の内容は次の通りである。なお、No.10 については、内容が 2 つに分かれるので、それぞれ 1) 2) とした。

6	「先生優しいよ。好きだな～」の g 子 の言葉。私の <u>不安</u> は初日で吹き飛びました。
7	幼稚園で h 男が <u>気取りもなくお友達とただただ笑い転がっている姿</u> をみることができたのは、ちょっとした(大変な)成長だと <u>うれしく</u> 思っております。また、おたのしみ会での <u>子どもたちのきらきら光る瞳</u> が、不思議なほど、両親を喜ばせてくれましたし、 <u>おかしくて、楽しくて、頬がゆるんで涙が出そう</u> でした。
8	何故か <u>先生とお話し</u> してすぐ <u>安心感</u> を持ったことを覚えています。子どもたちがすぐに先生を大好きになったことがそのあらわれでしょうね。
9	i 男と私は実は…先生のことが <u>大好き</u> でした!! i 男は幼稚園嫌いでしたが、いつからか? 何があったのか? (私はいまだに分かりませんが) 幼稚園が大好きになり、B 組がとても楽しくなり、 <u>毎日おめめをキラキラさせながら登園</u> していました。
10	1) <u>ちょっとした事でも(良いことでも悪い事でも)</u> 園での事を報告してくれる 先生を <u>大好き</u> になりました。 2) <u>おこる時も、バシッと!!</u> 見ていてとても勉強になりました。
11	お声をおかけくださって、 <u>j 男の幼稚園での様子を知らせていただいて</u> 、j 男のことをよく見てくれてるって感謝するとともに、先生の言葉で j 男とむきあう時間も自然に多くなり、また <u>励み</u> にもなりました。
12	<u>母も朝やお帰りの時にかけてくださった一声</u> でとても <u>安心</u> しました。

No.6, No.8, No.9 で書かれている「具体的なことから」は、共に家庭における「子どもの様子」である。

No.6, No.8 の保護者は、進級当初、担任交代による不安を抱えていたことが記述から読みとることができる。担任の交代は、子どもだけではなく保護者の不安でもある。それが解消した理由が、子どもの「先生優しいよ。好きだな～」という言葉だと書かれている。つまり、自分はままだどのような担任かも分からずにいるが、子どもが「先生が好き」ならば「不安も吹き飛ぶ」と書いている。「子ども

の様子」が担任への「信頼感」につながっていると考えられる。同様のことがNo.9にも言える。子どもが幼稚園を大好きになり、「おめめをキラキラさせながら登園」することで、教師への「信頼感」をもったと考えられる。

No.7で書かれている「具体的なことから」は、幼稚園における「子どもの様子」である。「気持ちもなくお友達とただただ笑い転がっている姿」「お楽しみ会での子どもたちのきらきら光る瞳」という、一方は何気ない日常の出来事、もう一方は行事という非日常の場面であるが、いずれも生き生きと楽しそうな「子どもの様子」である。そして、このことが教師への「信頼感」につながっていると考えられる。

No.10 1) と、No.11, No.12は、前述の降園時に教師がその日の保育の内容を保護者に話す場面ではなく、教師が個人的に声をかけ、話している場面だと言える。教師から「子どもの様子」を聞くことで、安心し、「信頼感」につながっていると言える。

No.10 2) については、教師のかかわり方が保護者にとってモデルとなり、教師への「信頼感」を感じていると言える。

(3) データ3の分析：2年保育5歳児C組保護者30名の「メッセージカード」

30枚の「メッセージカード」の内、①「具体的なことからの記述があり、信頼感が表現されている」に分類されたカードは13枚であった。13枚の内容は次の通りである。

13	音楽会の時のk男のあまりにもニコニコととびっきりのいい笑顔に私もつられて笑顔になりました。
14	絶対お休みしたくない 大好きな幼稚園。1年間、どうもありがとうございました。
15	家に帰ると必ず「歌を口ずさんでいます」。歌を歌うときは、とても楽しく気分がいい時だと前に講演会で聞いた事がありました。幼稚園が楽しく充実していたんだと歌を聞く度に思います。
16	1男が「覚えたての字で「先生に手紙書くんだ」とかきれいな葉っぱやお花を見つけると「先生に持ってく～」と言っている姿を見たら安心出来ました。
17	(土曜日の朝に)「え～！なんでえ～行きたいよお。あーあ、行きたかったなぁ…」と言っていました。楽しい園生活をありがとうございました。
18	指をくわえ私の後にかくれてた E男が虫取り名人でコマ回しの師匠になりました。たくさんの思い出と自信を持って1年生になります。先生、ありがとう。
19	m子は、特に「ドッジボールが大好きで、いつもうれしそうに話してくれます」。1年間、ありがとうございました。

20	n子は先生のことが「大好きで大好きで、毎日幼稚園に行くのが楽しみ」でした。ありがとうございました。
21	o子のもち帰ってくる、園での話を聞く「のがとっても楽しかったです。いい思い出がいっぱいで、とても感謝しています。
22	少し不安でしたが子ども達は、すぐに「せんせいの事が大好きになった様子」で、とても安心しました。
23	p男の頑張った事や、変化していった事、怒った事など、「いろいろいっぱいお話してもらえて気にかけてみていてくれた事」にとってもうれしく思ってます。
24	いっぱいいる「C組の子どもたちをみながら、q子のこともよくみていてくれました」。あたたかく見守っていただき本当にありがとうございました。
25	緊張しやすくごあいさつも苦手な「r男にいつもr男の顔をしっかり見て「おはよう」「さようなら」と言っ て下さる姿」にうれしい気持ちにさせられました。

No.13で書かれている「具体的なことから」は、幼稚園の行事における「子どもの様子」である。保護者にとって、子どもが行事の中でできなかったことができるようになったり、真剣な顔で取り組んでいたりすることもうれしいと感じると言える。しかし、ここでは「ニコニコととびっきりのいい笑顔」をしていることが「つられて笑顔」になるほどのうれしさになっている。

No.14, No.15, No.16, No.17, No.19, No.20, No.21, No.22の9枚のメッセージは、すべて家庭における「子どもの様子」である。子どもが「絶対休みたくない」「あーあ、行きたかったなぁ…」「楽しみ！」と話す姿は、やはり保護者の安心感、「信頼感」につながることが読みとることができる。

また、子どもが幼稚園で覚えた歌を口ずさむ姿から、幼稚園の楽しさや充実した様子を思い浮かべていることが分かる。筆者は、保護者から、自転車に乗っている時や歩いている時、入浴時などに子どもが幼稚園で覚えた歌を大きい声で歌うという話を度々聞いてきた。その保護者たちは、一様に安心感やうれしさを感じると話していた。子どもが歌う様子は、子どもの笑顔と同様に保護者の安心感やうれしさとなり、「信頼感」につながると考えられる。

No.18の保護者は、幼稚園での「子どもの様子」を、「虫取り名人」「コマ回しの師匠」と教師が保護者に伝えた表現で記述している。子どもの得意なことが認められていることにうれしさを感じていると言える。

No.19, No.21は、子どもが話す内容のことを書いている。5歳児ということもあり、保護者との会話の中で、保護者に分かりやすく具体的に話すことができていることが考えられる。その内容を聞いて、保護者は安心したり、子どもの一面を知ったりしているのである。

No.22の保護者は、担任交代時に不安を感じていることが記述から分かる。そして、子どもが「せんせいの事が大好き」になったことで安心していているのである。

No.23は、教師がこの保護者に個人的に声をかけ、保育の中での「子どもの様子」を話している場面を書いている。この保護者が「子どもの様子」を知ることができたことだけを書いているのではなく、「気にかけてみてくれた事」を「うれしく」思っていることが分かる。教師は、保護者に「成長を伝える」ことを意識しているが、保護者はそのことから「気にかけていること」「みていること」ととらえていると考えられる。

No.24は、「教師の様子」について書いているが、「教師が子どもたちの様子をよく見ている」ことをとらえて「信頼感」を感じていると言える。

No.25では、教師の子どもへのかかわり方を見て「うれしい気持ち」になっている。

(4) データ 4 の分析：2年保育5歳児D組保護者28名の「メッセージカード」

28枚の「メッセージカード」の内、①「具体的なことからの記述があり、信頼感が表現されている」に分類されたカードは9枚であった。9枚の内容は次の通りである。なお、No.33については、内容が2つに分かれるので、それぞれ1) 2) とした。

26	先生が大好きな息子はもう聞けなくなるから「先生のお話を聞けなかったらもったいない!」と言っていました。先生にお会いできてよかったと心から感謝しています。
27	D組はクラス全体の雰囲気が良く、子ども、皆がいつも笑顔なのは、やはり先生のご指導のおかげだと感謝しております。
28	運動会でずいぶんご迷惑をおかけしましたが、何とか乗り越え、今では「私はリレーが得意だ」と言っています。苦手意識をもたせない指導力に感激しました。「子どもたちが毎日楽しく元気で過ごせた幼稚園生活、私にとっても、嬉しく、素晴らしい一年」をプレゼントしていただきました。
29	先生が本を読んでいるときの子ども達の集中した姿は、忘れられません!!
30	s男はできないことができるようになったとき、先生と一緒に喜んでくれることがすごくうれしかったです。本当にありがとうございました。
31	面接のとき、先生がとても気にかけて下さっているのが分かり、私も安心して幼稚園に送り出すことができました。

32	t男の成長を「親身になって見守って下さった事」に心から感謝しております。
33	1) u子のことをよく見ていただき、理解して頂きました。 2) 「園での様子もよくお知らせいただき」、安心してお世話になることができました。
34	先生に出会えて幸せです。感謝しつつせぬ思いです。娘は、できなかったことができるようになった時、大変な想いをしても達成できたとき、これくらいいいや…と投げてしまいそうなとき、「先生にこう言われて、もうちょっとがんばったら、こんなにすごくなったんだよ!!」と、「キラキラした目で話してくれました」。

No.26, No.30で書かれている「具体的なことがら」は、家庭における「子どもの様子」である。No.26の保護者は、子どもが「もったいない」という言葉を初めて使ったのが「幼稚園を休むことだった」、と筆者に話してくれたことがあった。「息子はどれだけ幼稚園が楽しいのだろう」と笑いながら話していた。この「子どもの様子」は、まちがいでなく保護者の安心感やうれしさ、「信頼感」につながると考えられる。

No.30, No.34では、子どもが話す内容のことを書いている。No.30, No.34については、コマ回しや描画、製作、縄跳びなどの場面だと思われる。あきらめずに繰り返し取り組むことを認めたり、小さな目標を分かりやすく伝えながら応援したりし、その成果と一緒に喜んだ記憶がある。この時点で保護者に話し共に喜び合ったと思うが、保護者は子どもからの話として書いている。子どもが話す内容を聞いて、教師への「信頼感」につながっていると言えよう。

No.27, No.29の保護者は、日頃の保育や保育参観の時の「子どもの様子」を書いていると考えられ、この様子が担任への「信頼感」につながっていると言える。

No.28は、家庭における「子どもの様子」の変化から、教師のかかわり方について書いている。

No.31, No.32, No.33は、「教師の様子」について書かれている。具体的なことの記述は少ないが、「気にかけている」「親身になる」「よくみている」という「教師の様子」が「信頼感」につながっていることが分かる。No.33の保護者は、2) で、教師が「園での様子を知らせる」ことも加えて書いているのである。

(5) データ 5 の分析：2年保育4歳児E組保護者19名の「メッセージカード」

19枚の「メッセージカード」の内、①「具体的なことからの記述があり、信頼感が表現されている」に分類されたカードは3枚であった。3枚の内容は次の通りである。

35	v子を温かく見守り、接して頂きありがとうございました。v子は「毎日ウキウキで楽しい幼稚園生活」でした。ありがとうございました。
36	おなかがイタイ？病の時、ごっこ遊びの時、工作の時など近くで、または一步はなれて「見守ってくださったこと」が、来年の年長さんの時に必ずプラスになるように思っています。親はあたたかく見守ることが難しいので…時には子どもの自立や成長を邪魔してしまうこともあります。たまに先生のように見守ることができるように頑張ります。
37	一年中、「娘をたくさんほめていただき」、ありがとうございました。私も、「(ほめ)達人」をめざして修行中です。

No.35は、家庭における「子どもの様子」である。子どもが幼稚園を楽しみに「ウキウキ」している様子は、保護者にとって「信頼感」を感じると言えよう。

No.36, No.37は、共に教師の子どもへのかかわり方について書いていて、保護者にとって教師がモデルとなっていることを示している。

(6) データ6の分析：2年保育5歳児F組保護者27名の「メッセージカード」

27枚の「メッセージカード」の内、①「具体的なことから記述があり、信頼感が表現されている」に分類されたカードは6枚であった。6枚の内容は次の通りである。

38	お迎えの時や面談の時など、「d男のトラブルのことさえも愉快そうに、話して下さり」、私の心配事は笑顔で「うん、うん」って聞いて下さり、その笑顔に、いつも「ほっとしたのを覚えています」。
39	初めての日、「泣きわめくe子をしっかりと抱きしめてくれた事」、一生忘れません。
40	w子の事を沢山ほめていただき ありがとうございます。先生のやさしい口調が大好きです。
41	F組での1年間、「毎日毎日たくさんのx男の生活報告をして下さりありがとうございます」。
42	y男は本当に「先生が大好き」で、「一番におはようを言うんだ!」とキラキラニコニコの笑顔で話していました。1年間、すてきで大切な思い出と時間をありがとうございました。
43	まだまだ緊張が強く、なかなか自分からおともだちの輪に入っていけない娘を「気長に見守って下さった」と覚えております。

No.38, No.39, No.40, No.41の保護者は、教師のかかわり方について具体的に記述している。No.38, No.39は、

教師がこの保護者に個人的に声をかけ、保育の中での「子どもの様子」を話している場面を書いている。

No.42は、家庭における「子どもの様子」である。子どもの言葉や表情から、子どもの教師への思いを感じ、「信頼感」を感じていると言える。

2. 分析結果の考察

以上のように進めた分析の結果に考察を加えていくこととしたい。

はじめに、全体的な結果としては、134枚の「メッセージカード」から、①に分類された「具体的なことがら」が記述され、教師への「信頼感」が表現されているカードは43枚であった。これは、本研究のはじめに「メッセージカード」という対象の限界で述べたとおり、データとしての限界を示す結果ということができよう。

しかし、この43枚についての分析からは、興味深い結果が明らかになった。それは、保護者は「具体的なことがら」の内容として、「子どもの様子」、あるいは「教師の様子」のどちらかを記述していることが分かったことである。その枚数は「子どもの様子」が23枚、「教師の様子」は20枚で、ほぼ半数ずつであった。保護者の教師に対する「信頼感」を表現する「具体的なことがら」としては、「教師の様子」を取り上げるものが多いと考えられる。けれども、分析からは「子どもの様子」を取り上げるものがほぼ半数あったということである。これは、保護者が教師に「信頼感」を持つときには、「教師の様子」そのものと同等の比重で、教師の保育の結果として表れる「子どもの様子」に焦点が当てられているということを示す結果となった。

さらに、「子どもの様子」について記述した23枚のうち、子どもの「家庭での様子」が18枚、「幼稚園での様子」が5枚で、「家庭での様子」を記述しているものが3倍の数と、圧倒的に多い。

「教師の様子」については、20枚のいずれもが「成長の姿を伝える」か「子どもへのかかわり方」を記述していることが分かった。その枚数は「成長の姿を伝える」が7枚、「子どもへのかかわり方」が15枚だった。なお、2枚(No.10, No.33)は、「成長の姿を伝える」と「子どもへのかかわり方」の様子が記述されているため、両方にカウントした。

以上の分析を表にまとめると、次のようになる。

(8ページ参照)

1 分析のまとめ

分類項目	枚数	メッセージカード番号
子どもの様子	家庭での様子	18
	幼稚園での様子	5
教師の様子	成長の姿を伝える	7
	子どもへのかかわり方	15

(注:No.10, No.33は内容が2つに分かれるので、それぞれ1) 2) とする.)

IV. 全体考察

保護者がどのようなことをとらえて教師に対して「信頼感」をもつのかを、分析とそのまとめから考察する。結果として「具体的なことがら」として現れた、二つの視点である「子どもの様子」と「教師の様子」に分けて考察をすすめる。

1. 「子どもの様子」を視点とした考察

本研究における「メッセージカード」の記述の分析からは、保護者の記述した具体的な「子どもの様子」は二つあり、一つは幼稚園での様子、もう一つは家庭での様子だったことが明らかになった。そして、家庭での様子を記述していることが圧倒的に多かったのである。幼稚園での「子どもの様子」を見る機会は保育参観や行事、あるいは、日々の送り迎えの時などどうしても限られる。それに対し、家庭での「子どもの様子」を見る機会は限りなくあることに改めて気づかされる。

この18枚の「メッセージカード」の記述を改めて見ると、

「笑顔で教師や幼稚園の話をしたり歌ったりする」

合計5枚

「先生が好き！と言う」合計4枚

「休みたくない、と言う」合計3枚

という「子どもの様子」が記述されている。子どもが幼稚園の中で、安定し、楽しく過ごしている様子をとらえることで、その背後にあるであろう教師の保育に思いをさせ、その結果として保護者は教師に対して「信頼感」をもつと考えられる。

この中には、保護者がこれまでの担任が代わることに不安を感じていたという思いをその記述内容から読み取ることができる「メッセージカード」が3枚あった。最後の「メッセージカード」では「子どもの様子」として「信頼感」を表現している場合でも、進級当初においては、保護者はなかなか教師との信頼関係を構築することができなかった。しかし、「子どもの様子」の変化をとらえる

ことで不安が安心感に変わり、そこから「信頼感」をもつに至ったことが分かったのである。

学生は、保護者との信頼関係を構築することを考えるあまり、保護者に対してどのようなアプローチをすればよいのかを考える時、具体的な保護者との対応の場面ばかりを考える傾向がある。もちろん、具体的に保護者に対応することも必要なことである。しかし、「メッセージカード」の分析からは、保護者は、さりげない家庭での子どもとのかかわりの中で、確実に「子どもの様子」をとらえ、それを教師への「信頼感」の構築につなげていることが明らかになった。

この結果からは、教師は日々の保育の中で、一人一人との信頼関係を築き、充実した保育を展開することが、子どもの育ちにつながるだけではなく、保護者との信頼関係を構築することと密接なつながりがあると言えよう。

2. 「教師の様子」を視点とした考察

本研究における「メッセージカード」の記述の分析からは、保護者の記述した具体的な「教師の様子」は二つあり、一つは「成長の姿を話す」、もう一つは「子どもへのかかわり方」だった。

まず一つめから考える。保護者にとって、幼稚園での「子どもの様子」は興味のあることに違いない。前述の考察で、保護者は「子どもの様子」や話から確実に幼稚園での様子をとらえているとしたものの、そこには限りがあることも否めない。そこで、教師が具体的に分かりやすく伝える「子どもの様子」は、単なる情報提供にとどまらず、その成長を共に喜んだり考えたりしていくうえで欠かせないと思う。

さらに、ここで重要なことは、話す内容は必ずしも成長する姿だけではなく、むしろ、明らかな成長としてとらえにくいことであっても「よく見ている」ということを伝えることだということである。それは、「成長の姿を伝える」と分類した7枚の内3枚に次のような記述があることである。なお、「」内は原文のままとする。

「…、j男の幼稚園での様子を知らせていただいて、j男のことをよく見てくれてるって感謝するとともに…」

(No.11)

「p男のがんばった事や、変化していった事、怒った事など、いっぱいお話してもらえて気にかけてみてくれた事にとってもうれしく思ってます。」

(No.23)

「u子のことをよくみていただき、理解して頂き、園での様子もよくお知らせいただき、…」(No.33)

この記述からは、保護者は幼稚園での様子を聞いたことと同時に、教師が「よく見ていること」「気にかけていること」をとらえていることが分かる。

実は、このことは、「子どもへのかかわり方」と分類した15枚の内5枚にも記述されている。

「子どもたちの様子をよく見ていて下さったので安心しました。」(No.4)

「いっぱいいるC組の子どもたちをみながら、q子のこともよくみていてくれました。」(No.24)

「先生がとても気にかけてくださっているのがわかり、私も安心して幼稚園に送りだすことができました。」
(No.31)

「t男の成長を親身になって見守って下さった…」
(No.32)

「先生のように見守ることもできるよう…」(No.36)

「見守る」ことも「見ている」ことに含めて考えると、「教師の様子」に分類した「メッセージカード」全22枚の内9枚に、「見ていること」についての言及があるのである。

そこで、改めて教師の姿の中で、「見ている」ということについて考えてみたい。もちろん、保護者は、教師がただ近くにいていつも「見ている」ことに安心感や「信頼感」を感じているわけではないことがその記述から明らかである。具体的には、「気にかけてみている」(No.23)、「親身になって見守る」(No.32)、「よくみて理解している」(No.33)、「気長に見守る」(No.43)などの記述になっていることから明らかである。

さらに、「見ること」において、保護者の教師への「信頼感」につながると考えられるのは、「温かく見守る」「あたたかい眼差し」などと言える。これについては、今回「具体的なことがら」が記述されていないために分析対象である43枚には含めなかった「メッセージカード」に、次のような記述があることからとも言える。なお、「」内は原文のままとする。

「幼稚園での様々な体験をあたたく見守ってくださり本当にありがとうございました。」

「いつも、あたたかい笑顔で、子供たちや、私たち母親を見守り、支えてくださり、ありがとうございました。」

「温く見守って頂いた事ありがとうございました。」

「娘の心をしっかり掴んで成長をあたたかい眼差しで見守って頂いた事に感謝しています。」

このように「温かさ」という表現が多い理由としては、修了あるいは担任交代時という節目において感謝の気持ちを表すための常套句ともとらえられなくはない。それを考慮してもなお保護者が「温かさ」をキーワードとして選ぶ傾向が高いことは、「信頼感」の構築を考える上で大変重要な結果といえよう。

この「温かさ」については、『幼稚園教育要領解説』の領域「人間関係」の「内容」および「内容の取扱い」の解

説部分に述べられている。「内容」の解説には、「幼児が周囲の人々を少しずつ確かめながら自分なりの目当てや期待をもって登園するようになるよう、温かな関心をもってかかわるようにすることが求められる。」¹⁶⁾とある。また、「内容の取扱い」の解説には、教師との信頼関係の重要性に関連して「幼児の行動に温かい関心を寄せること」¹⁷⁾があげられている。「温かい関心」とは、解説部分の記述¹⁸⁾から、「幼児のありのままの姿を大人がもっている判断の基準にとらわれることなく、そのまま受け止め、期待をもって見守ること」「幼児が他者を必要とするときに、それに応じる姿勢を教師は常にもつこと」「幼児の発達に対する理解と自分から伸びていく力をもっている存在としての幼児という見方にささえられて生まれてくる教師の表情やまなざし、あるいは言葉や配慮」と考えることができる。

これは、教師が保育を行う上でのねらいや内容である。しかし、そのことが、保護者の記述にある「気にかけて」「親身になって」「気長に」「見守る」ということとつながっているという結果が得られた。つまり、保護者は、教師から我が子の成長の姿を聞くことによって「信頼感」をもつのではなく、その基盤となる保育実践そのものの中での「温かい関心をもって見る」教師の姿勢を、教師の語る言葉の中からとらえ、そこに「信頼感」をもつのではないかと考えられるのである。

V. まとめと今後の課題

筆者は、学生が感じる「保護者対応」すなわち、どのようにすれば保護者が自分に信頼感をもつのか、という不安を解消する手がかりを得ようと考え、そのデータとしての限界を踏まえた上で、「メッセージカード」を研究対象とした。

その結果、保護者は「幼稚園が楽しいという子どもの様子」、「教師が子どもに温かい関心を寄せている様子」をとらえていることが明らかになった。この2点は、保護者との信頼関係を構築するためにこれまで指摘されてきた「子どもの姿を伝えること」「保護者と幼児との活動の機会を設けること」「保護者と親密感をつくること」などの方法を否定する結果ではなかった。

しかし、このように直接保護者に対応する場面からばかりではなく、「幼稚園が楽しい」という「子どもの様子」を感じとることによって、教師への「信頼感」を構築していることが多いことを明らかにすることができた。

さらに、教師が「子どもの姿を伝えること」においても、保護者は「子どもの様子」を知ることにとどまらず子どもに寄せられている教師の温かい関心をとらえ、そのことによって教師への「信頼感」を構築していくことも明らかにすることができた。

このことは、何か特別なことをすることだけが保護者の

信頼感を得るわけではないことを示唆している。一人一人の子どもに温かい関心を寄せ、子どもとの信頼関係を基盤に日々の保育を大切にを進めていくことは、保育のあり方そのものの問題である。今回の結果は、「メッセージカード」という極めて限定された資料の分析ではあるが、保護者が教師に信頼感をもつための一つのポイントを示していると考えられる。つまり、保護者の信頼を得るための一つの具体的な方法は、子どもへの温かいまなざしを基盤とする保育を実践し、その保育における「子どもの姿」を具体的に伝えるということだと言える。この結果は、学生に対し、保育のあり方と保護者との信頼関係を築くことの密接なつながりを示すこととなり、不安の解消に寄与するものとなると考える。

今後は、「メッセージカード」以外に対象を広げて研究を進めていきたいと考えている。たとえば、保護者との情報交換の機会、保護者と幼児との活動の機会、クラスだよりの活用などを通して、保護者がどのようなことをとらえて教師に対する信頼関係を構築するのかを明らかにすることを課題としたい。

引用文献

- 1) 文部科学省, 幼稚園教育要領, 2008
- 2) 文部科学省, 幼稚園教育要領解説, 2008, p.266 1. 23 ~1.30
第3章 指導計画及び教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動などの留意事項 第1 指導計画の作成に当たっての留意事項 1 一般的な留意事項の8項目。
- 3) 文部科学省, 幼稚園教育要領解説, 2008
- 4) 同上 p. 217 1.12~p.218 1.1
- 5) 『保育所保育指針』にも家庭や地域社会との連携を図ることが述べられ、特に、第6章に「保護者に対する支援」という章が設けられている。
- 6) 田代和美・松村正幸編著, 演習 保育内容 人間関係, 建帛社, 2009
- 7) 同上 p. 93 1.4~1.5
演習13 育ちを支える保護者と保育者との人間関係 1 はじめに (1) 園と家庭が子どもを育てる
- 8) 同上 p. 94~P.96
演習13 育ちを支える保護者と保育者との人間関係 2 大切な信頼関係
- 9) 同上 p. 94 1.5~1.6
演習13 育ちを支える保護者と保育者との人間関係 2 大切な信頼関係
- 10) 久富陽子・梅田優子, 保育方法の実践的理解, 萌文書林, 2011
- 11) 木山徹哉 他, 保護者の保育ニーズに関する実証的研究, 九州女子大学紀要第39巻1号, 2002, p.17~p.30
- 12) 平成19年改正の学校教育法施行規則では、自己評価・学校関係者評価の実施・公表、評価結果の設置者への報告規定が新たに設けられ、一部が幼稚園に準用されている。
- 13) 森上史郎・柏女霊峰編, 保育用語辞典, ミネルヴァ書房, 2008, p.161
「K・J法」の項には、他には「文化人類学者、川喜多次郎が考案した質的データの整理法。」と記述されている。(著 清水道代)
- 14) 3つめの「具体的なことがらの記述がなく、信頼感も表現されていない」にグルーピングされたメッセージカードは、幼児の写真や幼児が描いた絵に、幼児が書いた文章が添えられているものである。
- 15) 「具体的なことがら」の表記は、「メッセージカード」の記述のままとする。記述に登場する子どもの名前は、保護者の子どもの名前であり、アルファベット(小文字)で表記する。
- 16) 文部科学省, 幼稚園教育要領解説, 2008, p.91 1.21
- 17) 文部科学省, 幼稚園教育要領解説, 2008, p.108 1.12
- 18) 文部科学省, 幼稚園教育要領解説, 2008 p.108 1.12~p.109 1.2に次のような記述がある。
「それは、やたらに誉めたり、励ましたり、付きまったりすることではない。幼児のありのままの姿を大人がもっている判断の基準にとらわれることなく、そのまま受け止め、期待をもって見守ることである。このような肯定的な教師のまなざしから、幼児は、自分が教師に見守られ、受け入れられていることを感じとっていく。しかし、「待つ」とか「見守る」ということは、幼児のすることをそのまま放置して何もしないことではない。幼児が他者を必要とするときに、それに応じる姿勢を教師は常にもつことが大切なのである。それは、幼児の発達に対する理解と自分から伸びていく力をもっている存在としての幼児という見方にさええられて生まれてくる教師の表情やまなざし、あるいは言葉や配慮なのである。」

Abstract

Many students soon to begin working in scenes of childcare practice say they feel uneasy about “dealing with guardians.” Although the necessity and importance of relationships of trust with guardians can be understood, they find themselves unable to specifically grasp how these relationships can be built up.

Then, what do guardian, on their part, think about it? Therefore, the study has been conducted for "message cards" as the subjects, which were written by guardian for teachers of their children at the time of graduation and the like. We presumed it possible to reach out explicit thoughts of guardian by focusing on “specific descriptions” of them, leading to reveal what kinds of recognitions about teachers made guardian develop “sense of trust” for them.

As a result, it has been revealed that guardian gave much attention to “appearance of their children enjoying kindergarten life” and “appearance of teachers taking affectionate attention to their children”. It is believed that the result shows a close link between such childcare as based on benevolent gazing of every single teacher at infants and establishment of sense of trust between guardian, contributing to resolution of anxiety in students.